若胡子屋

若胡子屋は、江戸時代に御手洗で営業していた4つの主要な茶屋の中では最大のもので、1724年に建てられたと推定されている。当時の茶屋は、お茶を飲むだけでなく、御手洗に船を停泊させた船乗りや商人を楽しませ、その活躍は御手洗の繁栄した商人文化の象徴とされていた。若胡子屋は御手洗で初めて広島藩から営業許可を受けた茶屋で、最盛期には100人もの遊女や芸妓を雇っていたといわれている。現在、御手洗に現存する唯一の茶屋である。

若胡子屋は、船乗りだけでなく、熊本藩や薩摩藩（現鹿児島県）など各地の大名やオランダ東インド会社関係の外国人旅行者なども訪れる高級店だった。薩摩藩との関係が深いことは、茶屋の材料にも表れている。畳の客間の天井や雨戸には、現鹿児島県屋久島の屋久杉が使われている。屋久杉は、当時屋久島を支配していた薩摩藩が輸出を管理していたため、特別な許可が必要だった。また、若胡子屋の中庭の壁には、遠く離れた鹿児島県の桜島半島の火山灰が飾られている。

京都や江戸の繁華街からは離れているが、この茶屋には高級な花魁（おいらん）がいて、高級な客をもてなしていた。若胡子屋の最上位の遊女（太夫）は、江戸や京都の吉原や島原の花魁に匹敵する刺繍の入ったローブを身にまとい、黒漆の下駄やべっ甲の櫛、金銀のかんざしなどの豪華なアクセサリーを身につけていたという。

若胡子屋の鬼灯とその遊女（神室）にまつわる有名な怪談があります。この話は「お歯黒事件」と呼ばれている。お歯黒とは、鉄の粉を煮酢に溶かしたもので歯を黒くすることである。江戸時代から歯が黒くなることは結婚していることを意味し、若胡子屋の遊女は「一夜の妻」とされていたため、客を迎える前に歯を黒くしていた。ある晩、いくらやってみても、禿はおいらんの歯に液体を付着させることができなかった。お客が来るのを待っているうちに、花魁はしびれを切らした。怒った彼女は、煮えたぎる湯を自分の禿の喉に注いだ。少女は両手に黒い血を吐き始め、壁にもたれかかろうとすると黒い手跡を残した。彼女は間もなく死んだ。それ以来、禿の亡霊は殺した女に付きまとった。また、茶室に雇われていた女性が 100 人になると、そのうちの一人が不思議なことに死んでしまうため、一度に 99 人以上の女性が雇われることはなかったと言われている。また、壁の高いところにあった禿の黒い手形は、絵の具では隠せず、今でも見ることができるという説もある。

御手洗の経済が衰退し、茶屋が閉店した後、1884 年（明治 17 年）に仏閣となった。この時に 2 階部分を撤去して、寺の講堂のスペースを確保した。昭和 28 年、御手洗行政が建物を入手して改修し、茶屋としての姿に復元した。現在は公共のスペースとなっている。